

ナザリック地下大墳墓 特級守護者の戯れ

時雨。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

n番煎じのオリ主アインズ様と一緒に転移しちゃう系二次創作。

至高の41人の一人だったけど、ひよんなことから設定大好きタブラさんと一緒に作りに上げた設定のせいでアインズ様と守護者達の間に入る中間管理職的な立場なオリ主のお話。

完全に思いつきな上に息抜き程度のもりなので文章や設定がかなりガバい。

思いつきで設定をぼこぼこ生やします。原作で見たことねえ設定なんだけどこれどうなってんだってなったら大体作者の脳みそから溢れてこぼれたもの。

不定期更新まっしぐらと思われませんが、皆様のお暇つぶし程度になれば幸いです。

目次

14	W h a t , s g o i n g o n ?	H e l l o W a r l d !! 1
----	--	--

Hello World!!

随分と時間ギリギリになってしまった。

まだ彼は待っていてくれてるだろうか。

ゲームにログインが完了したことを確認し、久々の自身のアバター姿を見る。鏡が無いので全身を見ることは出来ないが、それでも目を引く白銀の鎧と濃紺に金のラインや装飾が施されたマントから所属はどうあれ騎士なことは一目瞭然な見た目である。

視界には入っていないが、確か身長は160cm代前半と低めで髪は淡い金、顔のパーツだと垂れ目が特徴的だったはずだ。

種族は人間じゃないが、アイテムの効果で見た目は完全に人間と同じようになっていく。人間に擬態しているのは本来の姿だとなんというか、大変目に優しくないからだ。

「そういうえばこの鎧もマントも入手するのに随分手間かけたんだよなあ。種族のせいで攻撃もバフもできないから装備品やアイテムで色々補うしか無くて苦労したっけ……つと、こんな所で感慨に耽ってる場合じゃないんだ。早く行かないと」

焦る気持ちを抑え、ギルドメンバーのみに与えられた指輪『リング・オブ・アインズ・

ウール・ゴウン』を使用して今朝方送られてきたメールに記述されていた待ち合わせ場所へと急ぐ。

見慣れた、しかし随分と久しぶりに感じる転移の光のエフェクトが体を包むのを感じながら、これまでの俺達の軌跡を思い起こす。

ここで出会った友人達と共に沢山の冒険をした。時に泣き、時に笑い、時には仲間内で対立してあわや戦争となるギリギリまで行ったことも一度や二度ではない。

我ががギルド『アインズ・ウール・ゴウン』。仲間たちと共に作り上げたこのナザリック地下大墳墓は、紛れもなく俺の誇りである。

そしてそのナザリック地下大墳墓の主人であり我々がギルドマスター。そう、今回俺達をここに招集した人だ。

俺達が沢山の時間と金を費やしてきたこの『ユグドラシル』というゲームは、本日を以てサービスを終了する。

だからせめて最後の一日だけでもまた皆で集まらないか、というのが今回の招集の旨。

転移の光が収まったのを感じて周囲を見回す。

大きな部屋の中心部に円形に並べられた座席。その最奥に待ち人——否、待ち骸骨は居た。

「お久しぶりです。モモンガさん」

約半年ぶりに会う彼は、骨ばった顎をあんぐりと開けて間抜け面をしていた。

「それにしても、最後ののに随分と寂しい光景ですねえ」

「そうですね……。呼びかけに応えてくれたのはヘロヘロさんと貴方だけでしたよ。シィグニトウスさん」

「もう殆どの皆さんがギルド自体を脱退されて居ますし、残る方々もリアルでの過労で死に体でしょうし」

「ははは、先程ヘロヘロさんもその名前の通りヘロヘロになってましたよ。どうやら残業続きで中々休みも取れていないようでした」

「それはモモンガさんだつて同じでしょう？最近ちゃんと7時間以上寝たの何時です？仕事だけじゃなく、こっちのギルドの管理までしてください……」

「ギルドの管理はシイグニトウスさんだつてちよくちよく来てくれてたじゃないですか。それに貴方は私よりも忙しいでしょうに。今をときめく売れっ子俳優さん。正直貴方が一番来るの嬉しいと思つてましたよ」

冗談めかすように言うモモンガさんの顔の側に逃うような顔のアイコンが電子的な効果音と共に表示される。

「あつちもこつちも引つ張りだこ——になつてくれるように日々走り回つてます。まだまだ業界じゃあ若輩者ですからね」

俺のリアルでの職業は一応俳優だ。

一応、と付けたのは俺が自分自身の力で一からこの道を歩んで来たわけではないためである。

俺は俗に言う二世という言葉で、幸か不幸か両親共に世界から認められるような大女優と大俳優の間に産まれてきた。

この世に産まれ落ちた時点である程度確約された未来のレール。世間からは上手くやれば「二世だから」、失敗すれば「二世なのに」と常に親とセットで見られる人生を送つてきた。

周りはいつだつて敵かおこぼれに与ろうとすり寄つてくる信用できない汚い他人ばかり。

幸いなのは両親がどちらも良識的で俺に対して優しくかったことだった。二人は常々「将来は好きに選んでいいのだ。お前が望むなら協力は惜しまない」と言ってくれた。しかし、それが当時の俺には逆に辛かったのだ。

世間からの圧倒的な期待とそれに相反する両親の認識。冷静になって考えればそんなことはないと思いつけることが出来るのだが、その頃の俺は恐らく人生の中で最も疲弊していた。

頭に浮かぶことは常にネガティブで落ち込んだ内容ばかりで、遂には『両親は俺に役者の才能がないことが分かかっていて俺が失敗することで両親の評判まで落としかねない』と危惧しているのではないかとまで考えだした。

自由とは何だ。俺に選ばせているようで選択肢なんて最初から無いんじゃないのか。どうして周りは二世、二世と指を指す。100%とは言わなくとも以前より確実に実力は伸びているはずだ。

頭の中を大丈夫、頑張らないと、自由、二世が毎日毎日延々とぐるぐる回り続ける日々を送り、気がつけば高校生活は終わっていた。

このまま役者になるための専門学校へ進学し、俳優を目指す。

俺は小さい頃から演技しかやってこなかったし、結局の所やりたいことをやれと言われてもこれしか知らないのだからこれ以外に選ぼうがなかった。

俺も、周りの人間も分かっていた既定路線。

子役の頃からある程度成長して大人と子供の境界線の年齢になってもそれなりに使ってもらえているという時点でもしかしたら周りの関係者からはある程度認められていたのかも知れない。

けれど、悲しいことに「お前はよく頑張っている」なんて言ってくれる人が俺の近くには居なかったのだ。

両親からは褒められたのなんて子供の頃以来で、最近はずっと心配ばかり。

世間の声は怖くて極力耳を塞いで。

ずっと自分のやってることは正しいのかと自問自答を繰り返した。

そんな日々の繰り返しにとうとう頭の何処かがイカれたのか、なぜか唐突に俺は現実から逃げ出さなくなっちゃった。

そこで手を出したのが当時爆発的な人気を誇っていたこの『ユグドラシル』だ。

そして俺は出会ったのだ。

生涯を通して初めて心の底から友と呼べる人達に。

……まあ、当時まだ学生なのに社会人だと偽ってギルドに加入したのはご愛嬌である。

「さて、楽しいお喋りも良いですが、そろそろ時間ですね。せっかくですし最後は玉座の間で迎えましょうか」

「良いですねえ。結局あそこまで誰かが攻めてくることもなかったですし、最後までいいカッコつけて終わりましたよ。それにその絵面なら俺もあの設定を使えますしね」

「あの設定って、もしかして以前タブラさんと詰めてたアレですか？」

「そう、ソレです」

俺が今使用しているアバターには少し特殊な設定がある。

といってもそういうのが大好きな俺とタブラさんとで作った完全なフリーバーテキストだが、以前特殊なクエストで俺の種族が半強制的に変えられるという事件が起こり、その際に「せっかくだし無理に戻さずそれっぽい設定を付けて別のナニカつてことにしよう」というなんともアバウトすぎる提案をタブラさんに受け、それを承諾してまったが故に引き起こされた二次災害である。

言い訳をさせてもらおうとすれば、ふたりとも深夜テンションでただでさえ残念なおつ

むがさらに残念な事になっていた。

翌日眠気と謎テンションのせいで記憶が半分吹っ飛んだ状態から朧気な記憶の断片を頼りにご丁寧に設定資料”集”と書かれたフォルダを発見してしまい、中身を開くと頭がおかしいんじゃないかと思うほど膨大な文章が記述されていた。

しかもそれと同量のものが複数あると気がついた時点で俺はウィンドウをそつと閉じた。

取り敢えず要点だけまとめると、マゾなのか？と言われても仕方のない程に攻撃を放棄した種族の強制的な仕様を見て煮詰めた結果出来上がったのは『ナザリック地下大墳墓特級守護者』とか言うよくわからないポスト。

どこがどうしてこれが出来上がったのかは正直あまり覚えていないが、割と俺だけの特別な役職という感じが結構気に入っていたりする。

玉座の間へと向かう途中でNPC達も回収し、いざ行かんと一列になって進んで行く。

巨大な門が開き、荘厳な空間が視界いっぱい広がった。

神秘的な青が煌めく空間に各メンバーのシンボルの描かれた旗が掲げられている。その下を歩み、遂に玉座へと到着する。

玉座へ腰掛けるモモンガさんの右手側にNPCのアルベド。

そしてその反対側に俺が立つ。

俺とタブラさんの書き上げた長つたらしい設定によると、『ナザリック地下大墳墓特級守護者』というのはモモンガさん達ギルドメンバーと守護者達NPCの中間管理職的なポジションらしい。

よって俺が立つべきはいつでも主を守ることの出来るアルベドと同じ位置というわけだ。

モモンガさんがNPC達に『待機』コマンドを指示し、NPC達がその場に止まる。

「そういえばアルベドを見るのは随分久しぶりですねえ」

「そうですね。基本的にこの玉座の間から動かしてませし」

そういえばアルベドはどんな設定だったか、とモモンガさんがつぶやきながらウインドウを開くと、呪文のような大量の文字列が表示され、二人揃って「「長っ」と声に出してしまった。

その直後にアルベドの製作者がタブラさんだったことを思い出し、モモンガさんと二人で顔を見合わせて苦笑いを浮かべた。

いや、モモンガさんのほうは表情筋というか顔がないので表情は存在しないんだが。

もし顔があつたらきつと近い表情をしていただろうというのは間違いない。

頭の痛くなりそうな長さの文章を下っていくと、最終行に顔を出したのは『ちなみに

「ビッチである」という凄まじいパワーワード。

流石ギャップに萌える男タブラである。

「流石にこれは可哀想というかなんというか……」

「それならそのスタッフで書き換えちゃいましょうよ。どうせ最後なんですし」

流石に最後の最後にビッチで終わるのも、というところでモモンガさんが管理者権限を取得し、それと同時に設定を書き換えるためのキーボードが出現する。

「うーん、シイグニトウスさん何かいい案ありますか？」

「そうですねえ……モモンガを愛している、とか」

「ぶっは!?!ちよつと、何言い出すんですかいきなり!」

そう言いつつも設定を修正していくモモンガさん。割と満更でもないようだ。

修正が終わわり、NPC達にモモンガさんが『ひれ伏せ』コマンドを指示し、NPC達はその場に跪く。列を為す美男美女が一条乱れぬ動きでこちらを敬服する様子は中々に壯観だ。

モモンガさんは息を付いて玉座に深く背を預け、顔を少しだけこちらに向ける。

しかし、何かを言いかけてそのまま顔の向きを正面に戻した。

「サーバーが落ちたら早く寝ないとお互い仕事に差し支えてしまいますね」

「はは、現実を見るのが辛い。……ねえモモンガさん。また、必ず一緒にゲームをしま

しようね」

「……ええ。もちろんです」

ユグドラシルでのギルドアインズ・ウール・ゴウンは終わってしまいが、メンバーさえ集まればきつとまた再建だって夢じゃない。

俺と、そしてモモンガさんが居る限り、ギルドアインズ・ウール・ゴウンは不滅だ。

だから、また皆で以前のように楽しい日々を——。

今見ている玉座の間の景色をしっかりと目に焼き付け、サービス終了三秒前に目を瞑る。

3

さようならユグドラシル。

2

さようならナザリック地下大墳墓。

1

本当に、楽しかった。

そして全てが終わる——はずだった。

0

3 2 1

「あれっ？」

素っ頓狂な声が自分の口と隣から聞こえた。

そして二人で顔を見合わせる。

「サービス終了、しませんねえ」

「そう、みたいですわね」

「延期とか？」

「それくらいしか考えられないんですけど……最悪何らかのエラーという可能性も」

「それはちょっと……あれ、チャットのウィンドウが開かない」

「GMコールも出来ません。これは少し、いや、明らかに異常ですね」

「これは一体どういう——」

男二人が若干パニックになりながらああでもないこうでもないと言い合う最中、鈴の音のような美しい声が響く。

「どうかなさいましたか？」

声のした方へ揃って勢い良く振り向けば、そこには先程までと同じ傳いた体制のまま不思議そうに小首を傾げるアルベドがいた。

What's going on?

「どうしよう、これ」

「いやあ、どうしましよう」

「これほんとうしよう」

現在俺は豪華なローブに身を包んだ骸骨と部屋の隅の小さなテーブルを挟んで顔を突き合わせている。

先程鏡で見た時は薄暗い部屋の中でもはつきりと分かるほどに俺の顔色は悪く、また骸骨の方ももし顔に肉が付いていればまず間違いなく同じ様に青い顔をしているであろうことは想像に難くない。

いや、その背に乗る期待度的に言えば俺なんかよりも彼の方が圧倒的に胃痛を感じているだろう。

まあ、彼は全身骨なので胃は本来あるべき場所には存在していないのだが。

そんなくすりとも出来ない骸骨ジョークは置いておいて、なぜ俺達が今これほどまでに追い込まれているのかを説明するには時系列を小一時間程前まで戻す必要がある。

俺達はどうやらユグドラシルの中に、つまりゲームの中に入り込んでしまったらしい

い。

もしくはユグドラシルにそっくりな何処かの世界か。

この二つの違いは正直現状どうでもいい。今現在進行系で何らかの異常に巻き込まれているのは確実なのだから。

そして俺達の胃を痛めつけてくる要因はそれだけではない。というかこつちが本命だ。

今までうんともすんとも言わなかったNPC達が自我を持って動き出した。それもさも当然だと言わんばかりに。

俺とモモンガさんがサービス終了のアナウンスも強制ログアウトも発生しないとしてんやわんやしていた所を隣で見えていたアルベドが俺達を心配して話しかけてきたのが事の発端だった。

GMコールというプレイヤー側の単語が理解できないとはつきり口に出してその事実を俺とモモンガさんに告げ、それに対して謝罪をした。

これだけで元のユグドラシルと比べれば大いに異常事態。

え？なにこれ、どうなってんの？と、挙動不審になるとまでは行かないものの、頭の中がフリーズした俺に対し、即座にNPC達に指示を出したモモンガさんは流石の一言に尽きた。

おお！我らがギルドマスター！と俺が感動と尊敬に打ち震えている間にもモモンガさんの現状把握は進み、最終的にアルベドの胸を揉みしだきはじめた。

モモンガさんの尊厳を守る為にきつと今後このことについて仔細を語ることは無いと思われるが、ただつい数秒前まで俺の中で最高潮だった彼への尊敬度が一瞬で急降下して行つただけ言っておこう。

そして現在はアルベドに守護者を第六階層の闘技場に呼んでもらうように頼んだ直後だ。

「はああ、いつまでもこうしていてもどう仕様もないですね。覚悟を決めて闘技場に行きましょう」

「そうですねえ。取り敢えず目下一番の課題は俺もモモンガさんもあの忠誠心マックスな彼らに合わせて支配者ロールで頑張る他ないというところですか」

「そうなんですよね……ああ、決まりかけていた覚悟が音を立てて崩れていく……」

「まあそこは任せといてください。初動で助けられた分演技では俺が出来る限りバックアップしますから」

「ははは、そう言ってもらえると少し気が楽になります。頼りにさせてもらいますよ」
力ない声で笑いながら天上を仰ぐモモンガさん。俺の唯一と言ってもいい長所である演技力。それにユグドラシルのスキルがそのままこの体に備わっているのだとすれ

ば事防御に於いて自分の右に出る者はいない。

ユグドラシル最硬の名前は伊達じゃない。

もしNPC達が謀反を起こして俺達に襲いかかってくるようなら直ぐにモモンガさんの盾になるように動こう。

数秒稼げれば後衛職のモモンガさんと超防御特化のタンクである俺とで綺麗に前衛後衛で役割が分担できるはずだ。

そう覚悟を決めて、俺達は闘技場へ向かった。

「指輪は問題なく機能したようですね」

「はい。これでアイテムの確認は最低限取れました。となると今度は——」

「スキル、ですね」

俺達はユグドラシルでは全体の上位数パーセントに位置する最上位プレイヤーの内の一角だった。だが、この世界でも同じ様に俺達の力が通用するかは分からない。

極論で言えばもしかしたらナザリックの外は200レベルの規格外がウヨウヨという可能性だってまったくないわけではないのだ。

その逆に皆クソ雑魚という可能性も無きにしもあらずだが、楽観視は出来るだけするべきではないだろう。

特に俺なんて攻撃スキルも能力向上バフも使えないんだから出来る限り臆病であるべきだ。

俺達が闘技場の入り口から姿を現して直ぐにこの階層の守護者であるアウラが解説席から見事な空中大回転を決めながら地面に着地した。

快活な笑みをこちらに向けて駆けて来る様子は見た目通りの少女に見えるが、一応設定では70代か80代のおばあちゃんであることを忘れてはいけない。

いや、エルフならまだ少女の枠に入るのか？

モモンガさんがアウラと話出した所でひと声かけ掛けて少し離れた場所まで歩く。

闘技場の中央を超え、更にもう少し歩いてから後ろを振り返ってモモンガさんまでの距離を確かめる。

「それなりに離れたな。俺は別にスペース使わないけど、モモンガさん魔法職だからなあ。確実に安全な距離を取るならこれくらいはあつた方が良いよなあ」

目測で最低20メートルは離れているはずだ。これだけあれば多少向こうがドンパ

チやりだしても流れ弾の心配はあるまい。

総確認していると、モモンガさんから何か言われたマーレがこっちに向かって走ってくる。

あつ、転んだ。

「ちよ、大丈夫か？」

「う、う、だ、大丈夫です」

マーレは杖を支えによるよると立ち上がる。見た目だいぶ満身創痍っぽいのが、これでも高レベルNPCだからダメージ自体は殆ど無いはずだ。

「何かモモンガさんから言付けか？」

「えっと、シイグニトウス様のお手伝いをするようにとモモンガ様が」

「あー、なるほど。といつてもそこまで手伝ってもらうことが多いわけじゃないんだけど……せつかくだし少しお願いしようかな」

「は、はい！頑張ります！」

「マーレは俺の種族がどんなものか覚えてるか？」

「シイグニトウス様の種族は『シャイニング光』、ですよね」

「そう、その通りだ」

俺が突然変異のごとく強制取得させられた種族はシャイニング光。本来の姿は中に浮かぶ光の

塊だ。この種族の何より特異な点は他の種族や職業が掛け算によって強力なビルドを組み上げていくのに対して一つの種族だけで完結するところにある。

シャイニング光になった時点で職業、つまり一般的にジョブと呼ばれるものを選択できなくなる。それと同時に今まで積み上げてきた攻撃系スキル、戦闘に関するバフ系スキル、戦闘に関するデバフ系スキルの全てが使用不可能になる。

その代りにプレイヤーに与えられるのは圧倒的な防御力。

シャイニング光が使用できるスキルは全て、シャイニング光専用スキルであり、その代名詞と言っても過言ではないのが『拒絶』というスキルだ。使用者本人を包み込むように直径2メートル程の球体が出現し、味方以外がその球体に触れるとかなりのノックバックを喰らう。

ノックバック自体にダメージは殆無く、ノックバックそのもので倒せるのは20レベルくらいまでの雑魚モンスターだけだが、その圧倒的耐久力で、シャイニング光が壁となりワールド・デイズスター数人で敵をタコ殴りにするという超悪辣な虐殺戦法が完成する。

これが綺麗に決まるとその戦場は大体虐殺の地獄と化す。

「さて、上手く使えてくれよ……」

他にも便利なスキルはいくつかあるが、『拒絶』が一つ使えるだけで何かあった時逃げ回る分には事欠かない。

相当なレベル差がない限り『拒絶』を貼った状態では追手も矢も使用者にはダメージ

を与えられないのだから。

『拒絶』

コンソールがないのでスキルを手探りで感覚的に発動させると、ゲーム内で見慣れた半透明な白い球体に体がすっぽり覆われた。どうやら成功のようだ。

「よし、マーレ」

「は、はい」

「なんでもいいから軽く俺に向かって攻撃してみてください」

「ええ!? そ、そんなこと……」

「あー、マーレの方からだと思えないんだっけか。俺も自分以外のシャイニング光なんて向こうでもほんの数人しか居なかったせいで使われた外側から見た覚えなんて片手で数えられる程度しか無かったからいまいち記憶があやふやなんだけど、一応ちゃんと守りを張れるはずだから安心してくれ。何ならそのへんの石投げつける位でもいいよ」

「ええつと、それじゃあ、えい!」

マーレの掛け声と共に眼の前に小さな土の手が生え、その指先が『拒絶』の表面に触れた瞬間に反対方向へ弾け飛んだ。動作自体はゲーム時代と変わらない様に見える。

「うん、上手く動いてる」

スキルの発動は感覚任せで基本的に問題はなさそうだ。使っていない他のスキルも

表現し辛いがなんとなく使えるような気がする。スキルを使う感覚を体が覚えているといった感じか。

各スキル最低10回ずつは発動練習をすれば最低限使い物にはなるだろう。

ふとモモンガさんの方はどうだろうかと見てみると、既に他の階層守護が続々と集まってきている所だった。

「どうやら他の守護者のみんなも集まってきたみたいだね。俺達も向こうに合流しよう」

「は、はい！」